

永野小学校・学校だより(9月)

夏に鍛え、秋の実りを

校長 小泉 啓治

夏休み前に高学年の男の子に、「夏休み中の楽しみは何？」と聞いてみました。すると、「あちこちでやるお祭り」と答えました。それぞれの町内会や自治会で週末に行われたお祭りには、子どもたちに故郷を感じてもらいたいという熱い思いを感じました。ありがとうございました。

また、夏休み中のある日(8月21日)の学校の様子です。運動場では今日もマーチングの練習が行われています。午前中の体育館では体験チャレンジの座禅教室。午後の家庭科室では同じく万華鏡づくり。音楽室では24日の市の小学校児童音楽会に向けての合唱クラブの練習。プールが静かだと思ったら、この日は相武山小学校で区の水泳記録会が行われ、66名の選手が出かけていきました。この日は特に賑やかでしたが、夏休み中とは言えいつも何かの活動が行われ、多くの子どもたちが学校に来ているというのが、本校の特徴の一つです。それぞれが目標をもって、保護者・地域の方々のもたくさん関わっていただき、実り多い活動ができたことに改めて厚くお礼申し上げます。ご家庭でも、さぞかし成果の多い夏を過ごされたことと思います。大きくなった体、広く深くなった心で新しいスタートを切りましょう。今日から学校が始まります。短い秋休みを挟んで12月までのこの期間は、学習にもスポーツにも最も適した季節です。夏に蓄えた力をエネルギーに、大きな花を咲かせてほしいと願っています。

休みに『アジア達人旅行』という本を読みました。著者の下川裕治氏は、何年にもわたってアジア各地を貧乏旅行している(この本は今から12・3年前に書かれたものですから、現在も続けているかは不明です)方です。その下川氏があるとき、日本から出発するその日に、膝を捻挫する大転倒をして、車いすや松葉杖を使いながらのベトナム・タイ・ラオス・ビルマを旅行したときの文章が載っています。

『そんな街をポツンと訪ねた松葉杖の旅行者に、アジアの人々は実に親切にしてくれる。階段や歩道橋を渡ろうとすると、だれ彼となく手が差し出される。街の安食堂に入ると、店員が慌てて飛んできて肩を貸してくれる。バンコクの街には、しばらく暮らしたこともあり、知人も多いのだが、全く知らない人まで、

「いったい、どうしたの」

と声をかけてくれる。ある男などは、

「いい医者を知っている」

と僕を連れて行こうとさえるのだ。時にそれはおせっかいの領域まで入り込んでしまうほどなのである。僕はそんなアジア人に支えられて、二週間ほどの旅を続けることができた。(中略)

確かにアジアには人が多い。人件費が安いから、食堂やホテルは多くのスタッフを雇うことができる。しかしインドシナには、それだけではない何かがあった。人々の心に、まだ余裕がある。アジアは捨てたもんじゃない。改めてそう思う。

僕は結局、左膝が完治しないまま東京に戻ってきた。帰国してから二週間ほど、僕はバンコクで買った松葉杖を使って東京の街を歩いていた。正直なことをいえば、一番辛かったのは東京だった。(中略)東京の人々は皆、悲しいくらいに忙しいのか、照れ屋なのか、誰ひとり僕には手を貸してくれなかった。(中略)人々の生活に余裕がなかった。だから、税金を使って、階段やスロープをつくり、目の不自由な人のために点字表示を施さなくてはいけないのだ。東南アジアには、そんなものはなにもない。だが、助けてくれる人がいる。それが仮に先進国と途上国の違いだとすれば、やはり寂しい。

虫の声も聞こえてくる季節です。テレビのスイッチを切って、家族みんなで読書をする時間ももちたいものです。

